

機関誌「九州派」7号

桜井考身

「集会には黒い時間表が皆の前に出された。(略) …時間表とは関係なく時間に生死のかかった宮崎の存在には相当驚かない我々さえ少々ビックリした。宮崎はスコップ(土を掘る道具)を持って参加した。博多の11月の午後七時はもう真っ暗だった。それに雨も降っている。(略) 宮崎は独り浜に出て穴を掘り出した。背丈ぐらい掘ると潮水が湧くので、次の穴に移らざるを得ないのだ。その『得ない状態』が次から次へ穴を掘らせ、12時ごろには七つの長さにして12米ぐらいの穴を掘っていた。暗い穴底で水に浸って懸命に掘っている。波の音だけの誰も居ない砂浜。掘り上げた砂は、高く側面に投げだされた瞬間鋭角をつくるがすぐ雨に打たれて鈍い角になってしまう。(略) 太古から繰り返し繰り返し訪れる波に、その空洞は僅かばかり残り、少ない仲間のみが穴の意味を知らされ博多の“コノ夜”、んクォも、僅かなあと何人が、このカラップの絶望の美しい穴を構築してゆくだろうか。芸術運動の意味は判らぬが絵画とは、所詮そんなムダ骨をおったマイナスの穴でなければ築くことの出来ない城なのではなかろうか。とすれば、なんと『ワビシイ』城塞であることだろう。このワビシイ穴を宮崎は深夜、現実には掘っているのだ(略)。満潮になったのか水平線が妊婦の腹のようにふくらんで徐々に穴を浸食し始めた。それはなんと緩慢に見えて迅速なんだろう。潮は完全に穴を沈め、巨大な波が宮崎を洗う。確かに海は母であるのだろう。(略) だが穴を彫る宮崎にとってすればまさしく性の悪い残酷な継母の様相だ。(略) 現実の宮崎は、海辺の砂浜に死を掛け、掘る行為によって凹の城を空洞で積み重ねてゆく。(略) この空洞のみが死を貧婪に喰い、肥えた時間の城と化すことが出来るかもしれない。宮崎は、その優しさに生まれ、優しさに喰われて死んでゆくのだろう。」